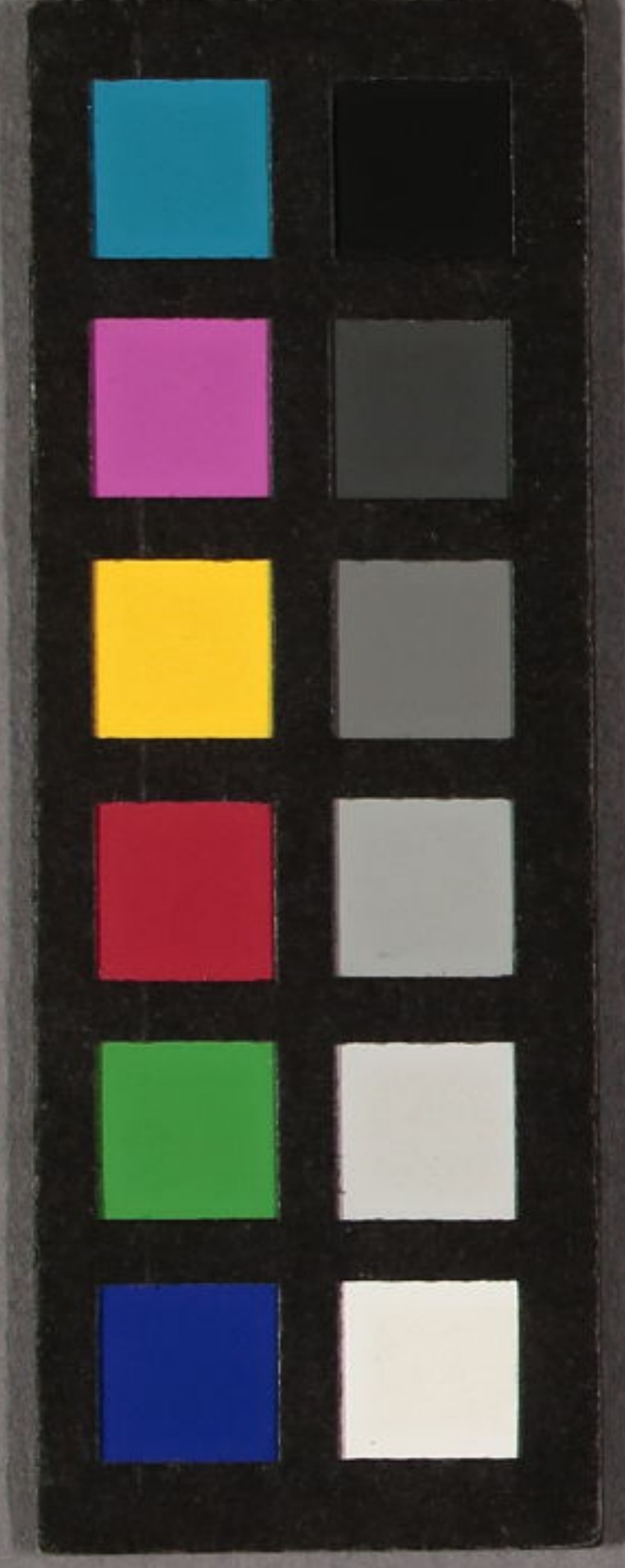




俳諧一葉集

二



俳諧一葉集附合之部

古学庵佛号
幻窓湖中 編
坎窩久藏 校

延寶五丁巳春

桃青

此稿千牛も初きと唱つて
まゝとや誰人下の作
まゝの粉と志やまゝる中
破味唱まゝの神象のト菊
摺跡を忍びおすゝるも
むろゝとゝ記の男めり
信章
青
章

小枕やうしうしうのうしうしう
 其の不うしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう
 かゝるうしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう
 能因はうしうのうしうのうしう
 照つてうしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう
 飢饉とてうしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

お友のうしうのうしうのうしう
 叶のうしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう
 うしうのうしうのうしうのうしう

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

名
 いさゝハ魔はしきまゝと久八尺よ
 セリシハく入おめうの
 三湯三井の古寺はけり
 最さきし終しきものち
 階はら目く八目より
 涌えけきき玉合の
 既子神みまうさめひ
 白蟻殿ハ沙年よりけり
 つくしと向うたしし
 入り入新屋ハ小蛇の
 思ふ殿ハ狐のあまき
 ぬきく子楊しし

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

唐人もみの月くしめ
 古文書実書のつぎ
 酒のあはけ起で白雪飛
 了物なふしや人のしき
 新のよまね秋の大木大
 流しとくえき多のあま
 秤うし日本の多きやう
 所々終のまきつめ
 花子とくしと禁の里ハ
 り坂とゆきハ峰のさし

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

同年春

章、青、青、青、青、青、青

書、書、書、書、書、書、書、書

書 庫 書 庫 書 庫 書 庫 書 庫

摩多摩多摩多摩多摩多

書 序 書 序 書 序 書 序 書 序

草 草 草 草 草 草 草 草 草 草 草

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

青 赤 青 赤 青 赤 青 赤

岩代の古名聞くと呼ぶる
 雙々あられのての羽衣
 田子の浦はうらもつゝ履持交
 不ぞ尻こつて阿戸の船舟
 お八海入りを後ふくしる疵
 松の根まろく石の強とる
 清きまゝや心女の恥をあら
 尾燈のたつて休の月
 糸を糸を糸のいふし所の秋
 涙をみくする雲きくめ
 衣袋弦の海くさるすねの風
 匂いもくへる乳ま白前

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

十冊

岩のき一巻二百巻とけく
 片の海ハさみふめてはま久山
 や今のたまりをききききし
 幽霊と来く海客の小ぬすみ
 舟縁ちの橋の上うらなさる
 初合世のあふまふあや
 祖父祖母とやおまわ若く
 被をいしや子龍きききき
 米俵のくちん肩よりけ
 木賃の夕風お三郎
 韋駄天もきききききき
 かきやきききききき川舟

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

十三

近寶六戊午春

さされぬ浮瑠璃小春の夜の花
 うさみにもにそふ人 秋
 青の面影ふ山より暮れしそ
 かゝるけの籠の奥のむねと
 春のうらみ春の涙の悲の舟
 春よよきと 雨の友とら
 玉のさしきぬるそとら
 ねをゆすりれ雲の秋
 春のけものおぬやと 豊と
 春のまじふと 豊と
 本舞のまじふと 豊と
 門 舞のまじふと 豊と

強田殿進退おもしろい
 二人の若れ浪人小姓
 井三子ちきれうもいふ
 けけやつけ張るの母衣
 心をあめさのほくをハ
 浪ちき入る大巻の洞
 若れ津地獄の店さうはら
 強扶解のちを碑くる
 酒の月ほあおの河振お
 隙の内役おまの
 肩をぬ袖さうする花
 中風もくハ世帯おま

春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋

瑞の尻入りのゆき雪をけ
 のり屋のうと鴨のうと
 山うけの精進おまの
 三十三手おまの
 手帳や後成仇のちうけ
 宇草は海小僧新者お
 いろは顔枯まのあう
 やを増補う時白馬秋
 新しうも月法の章根あ
 時の雪おまの
 雪舞うまの
 まういふおまの

春 秋 春 秋 春 秋 春 秋 春 秋

青 德 章 青 德 章 青 德 章 青 德 章

青浦章青浦章青浦章青浦章

青 法 章 青 法 章 青 法 章 青 法 章

青 渚 亭 青 渚 亭 青 渚 亭 青 渚 亭

邯鄲の里の新花月明く
 よくくわゆるいふを歌る
 子うより十萬倍も鼻の先
 系おりくわゆる武吉の落
 音楽のふり三味線あいの山
 四折さハく井の初 法
 姉妹く御伽は丘尼のけしき
 後家そくわゆるの佛くわゆる
 ゆつき美玉の膚くわゆる
 小娘みくわゆるの草 袋 町
 松林油くわゆるやき 姉 さん
 鯛く飯ゆちき 焼く

青 油 青 青 油 青 青 油 青

さゆきくわゆる汁のくわゆる情
 連理の葉はれくわゆるを枯く
 空や花白ふくわゆる焼 弟 の 子
 店ちく帰くわゆる羽 第 の 子

桃 筆

同年春
 物よりふく増や古郷のいのち
 作くわゆる百 野 里 の 春
 峰くわゆるの草 鞋 の 初 子
 ふ人力のあふ風くわゆるこ
 態つふくわゆるのくわゆる
 有衣を穿くわゆるのくわゆる

桃 青 作 章 油 青 青

雲の影をのらぬるつらひと
尾花の初を鏡かきく可
おとん いさゝ風めまきく吹
丈ハ山依海士れふいあ
一念の解と毒く七まとい
かゝらハ鬼め火神いこく
残ふりし修なるよりより
神めいさきとくそ 蟹め
魂をこねのあやうや切つん
流石とれりちんちんり
骨つき忍びのまきく魚つし
まじくふくあやうけくめあ

海 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

夕多き少風をなほす水の月
本際さくさの紅葉さくく
花を風所きらんをりそ
細りつるさく 雲くれゆ
て海原信令すく陽く
勤まゆふす二月月中旬
新也殿子法式儀くまきん
八万能所所古多所き
張張や十方世界のりれ
んいのらハ春去のあ
いんやうの地環るれまの秋
る海くぬすに杖るゆく月

海 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

約よりと新おしとくまのち
東坡の山より外の一む
其里の石すの文よりい
歌子の海本紙魚のさうさ
去用されしと紺紙の青紙に
谷よりいへる美砂のこ
二 夢の風若き相調り投け
吹矢とちかき雲海に月
秋の名残のさなやとねえ
まのちねむり曹より
志をききとてきしきりて
そ業平の情人やふか

海 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭

本城色は新衣の質より
ひんやの秋は社尺のき
物やうしき官野のき
松江の海はあ店り 嗚
めく桶の鯉のききとつみけ
平月白うらむくの忌
花よりいん家のおれ
父大郎のききとつみけ
三 子そや十二ひきのき
笑の中よりききとつみ
お男の席のききとつみ
と儀のお解きとつみ

海 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭

青 湖 章 青 湖 章 青 湖 章 青 湖

青 浦 青 浦 青 浦 青 浦

書 畫 之 妙

桃青

青、似春、回友

喜 喜 喜 喜 喜 喜

長老のしるふ君をりしりし
 僧善すふれの時やいししあ
 宿ものありしをききまうす
 花のまを張山やうみ傳く
 宗生のころよりふもふのま
 白砂の旗きまのころを
 ふとを軒端よりやめふくは
 寺のゆり定家ありけりま
 骨のふねのふねのふね
 八百手傳の光家文く
 狸のころちやめま寺の秋
 狼や香けり衣きあひま

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

後 等く 信正、 谷
 一室峰岩よりあつた刀の伝
 手とまぬく彼の僧の懐
 々々やす切まゝ花あつた
 溪の似をそとあひ竹の一村
 張を扱ふ角く経年よの
 みのけの胸の火よりけりあ
 三 ささくな長持やうれ
 いさまの人をうき物やあ
 張の敷すま盤膝うき後助て
 研哉勝く双とるう川
 おもくくかゝる静ぬのそと

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

書、書、書、書、書、書、書、書

書書書書書書書書書書書

書

書書書書書書書書書書書

けんどいさまや山の端に
 小舟のちり溜の月と月
 展平沈む新雪の
 寒風も山を渡るかられ
 かゝるれ下におく
 片ハみやうふ人形は風も
 海士のきりハ新のこくに
 ぬく新雪火よりて松を
 ハる豆腐もこもみ
 面影はねる——大根を
 あうー陰よりうきむねの月
 春、春、春、春、春、春

同季秋

のまれり初の大春江戸の秋
 泪のかきとふ金に月
 蜀山とのきりきり
 海舟は煙ハ灯浪こす
 碓のねいさうねねの
 与ねりやうき仙境入
 ぐやうきやうの上さみ
 いつともやうに
 伊所うきやうお強ハ
 けり——のけきはなれ
 初め——はきりとのきり
 春、春、春、春、春、春

春燈

似春

解かろしきひしけきものし、
お作ししは能くそあるの降のや
被のふくそきし 桂は
小きもきも大もわしと思ふ
鬼くくすしき生補ふて
天も花もまの疎粒力なり
飯のこころはききききき
あふきき猫ハ印しききき
廻つひのふくききききき
おのききききききききき
金輪際ききききききき
鬼は門は降のききききき

ききききききききききき

おそき骨のききききき
蒼ききききききききき
古物右近ききききき
古川のききききききき
ききききききききき
日待ききききききき
やききききききききき
ききききききききき
肉ききききききききき
おききききききききき
ききききききききき

ききききききききききき

青 澄 春 青 澄 春 青 澄 春 青 澄 春

沈嘉禾

桃青

春院
似春
春
春
春

ゆふふ（やうふふ）
浦もや根もあけし悔むに
荒 阿はゆくと謝の又浪
於小舟米焼の泣きひき
花も心もあふきき
とゆふふふふふふふ
大海ふふふふふふ
一匹の月合のわらふふふ
ばらちふふふふふふ
数芝居ぬれふや袖の雨のや
左のふふふふふふ
麦飯の井やふふふふふ

ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ

妙ふふふふふふふ
幽冥ハ残海舟ふふふふ
さの休るふふふふふふ
投ふふふふふふふふ
智天ふふふふふふふ
帳師の志気もふふふふ
ふふふふふふふふ
ふふふふふふふふ
既ふふふふふふふ
将の力様所ふふふふ
ふふふふふふふふ
ふ男ふふふふふふ

ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ ふ

朝の床より起るる一鳴
 庭の草花みくら一花も男心
 ききものもあつたのうへ山
 休は暇のよめうけふもあつた
 古来より一仲人のうへ

春 春 春 春

同

桃青

室や内下は金に通う町
 まう数あるぬ看板のうへ
 新築のうへはうかられり田舎のうへ
 芦の葉のうへはうかられり田舎のうへ
 甚や棚のうへはうかられり田舎のうへ

二葉子 紀子 卜尺 二葉子

一男よりとる市その時
 糸ものも光悦流るうへ
 糸草のうへはうかられり田舎のうへ
 糸草のうへはうかられり田舎のうへ
 糸草のうへはうかられり田舎のうへ
 糸草のうへはうかられり田舎のうへ
 糸草のうへはうかられり田舎のうへ
 糸草のうへはうかられり田舎のうへ
 糸草のうへはうかられり田舎のうへ
 糸草のうへはうかられり田舎のうへ

桃青 紀子 卜尺 二葉子 紀子 二葉子 紀子 二葉子 紀子 二葉子

龍田のれくれ坊主とくくく
 毛體も佛門の目くら錦あり
 そらや霞裳の深草する
 破れ袈裟の雪の白く吹く
 岸より羽の郭云とく
 押入や淀のくく北窓の
 織子の衣の物衣の衣の森
 能くまを妙の松のく
 庭様うくくゆくくく
 月郭とす根のくくくく
 姐板の月松の不二
 昔の秋三子餅人の拂物

二葉子
 紀子
 ト尺
 二葉子
 紀子
 ト尺
 二葉子
 紀子
 ト尺
 二葉子
 紀子
 ト尺

釋かともくくくく
 叔母の精舎のくくく
 大坂の川と瓦のくく
 秋の火入とくくく
 鬼一口のくくく
 昔の村のくくく
 是れくくくく

二葉子
 紀子
 ト尺
 二葉子
 紀子
 ト尺
 二葉子
 紀子
 ト尺

同七五未冬

柳青

荒瀬味喰くくく
 信月其のくくく

千春
 信徳

瑞々然と衣おもくうけつ
嵐とくう然も力の入るや
紙糊けしとハ勢ゆるし
何れ強しやい女、枕の初尾を
百あねさるたふれのか
仇し吾をかうこの程分の説きハ
あゝいハてゆら十太の能海
又男の思かうらハかうわ
古の物語を志し
つくくは記論のやを宿るを
終ひくとあぬさへきうの家
預かりもれくやうさうの月

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

雪片をさるる所の細き
料理人沙あをさるる所の浪
木を厚の扇けのまき風
佐吉のゆきと尺のぬ小刀抵
海の娘松 踊ものをもとく
まぐに襦袢と袖も緩つ
枕あくくく一 揺めけの果
端とつす天のぼる中踊る
経の白あき踊るさうさ
滑川のゆき 艾子火きき
朝雲くく 雨雲の風
いさきさく 利久といふは沙路

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

新は糸の三郎——春の月
 虫のあつて——夏——
 いそこ長——石棚の——
 さんぶれ——は時をいそひる
 園生のまゝ——十四
 引くや——乞食の妹背も——
 うらひ——はつてこものきぬ
 思ひ川——は七りのあゝ
 月さや——はつてこものきぬ

春 春 春 春 春 春 春

同手春
着想

さけ——二内——旬——
 天のわがけ——あつて——
 曲を——はつて——
 走らふ——はつて——
 中——はつて——
 谷の戸に——はつて——
 上——はつて——
 ちり——はつて——

秋 秋 秋 秋 秋 秋 秋

同
 いそつ——はつて——
 山を——はつて——

秋 秋

まゝの桶をの度細月をさして
 らぬのこゝろ風のみくは
 何の時を餅のまゝの空のち
 猪をさるゝの時のぬく
 朝のけち岩根の床にさる風
 あつた湯をさるゝすまのこゝろ
 柔巾をさるゝ袖のつた風こゝろ
 何と軒子さるゝのけちの
 五十点あつた中もけちの
 けちのさるゝのけちの
 随分さるゝのけちの
 青羽のさるゝのけちの

風、風、風、風、風、風、風、風

小瓶の湯をさるゝのけちの
 らぬのこゝろ風のみくは
 何の時を餅のまゝの空のち
 猪をさるゝの時のぬく
 朝のけち岩根の床にさる風
 あつた湯をさるゝすまのこゝろ
 柔巾をさるゝ袖のつた風こゝろ
 何と軒子さるゝのけちの
 五十点あつた中もけちの
 けちのさるゝのけちの
 随分さるゝのけちの
 青羽のさるゝのけちの

風、風、風、風、風、風、風、風

道へ橋をすくくも路の
夢路のつよりよふまの
親父の殿さしは船の川に
さけはるくけ彼岸より
秋風や赤城の峰を
そよ風さしき 春のふ家
は月を美濃の川に
海はくさけくぬくね
春の川はくさくさ
河原の川に 舟の岩角
大坂をハヤハヤ
松のふくくす下帯も

春風、春風、春風、春風、春風、春風、春風、春風、春風、春風

まて柳の枝折波のよ安貝
瀬の岩の根の底
破小舟削きけくさく
本城の川に 春の川
そよ風さしき 春の川
かきくさく 春の川
味増すくさく 春の川
三子川に 春の川
つりくさく 春の川
おきくさく 春の川
春の川に 春の川
春の川に 春の川

春風、春風、春風、春風、春風、春風、春風、春風、春風、春風

四十一

風 春 風 春 風 春 風 春 風 春 風 春

青風青風青風青風青風、青

青 磨 水 青 角 水 磨 角 青 磨 水 青

角水廣角青廣小青角水廣角

柏杞子初青け魂鳥の魄
 志人け狭き心けり夏外
 而るるるるる風るあ
 夕暮るるるる吐きい
 氏屋のりる腹をせくむる
 咲いの木趣る子け地、味く
 まる家わくく出はあ、古是
 月尺きむる解るる向晴るる
 あるるるるるるるるる
 従軍るるるるるるるるる
 約取おるるるるるるるる
 是るるるるるるるるるる

青 廣 水 青 角 水 廣 角 青 廣 水 青

四
 十一
 五

幣るるるるるるるるるる

角

同

厚るるるるるるるるるる
 重なるるるるるるるるる
 下るるるるるるるるるる
 月るるるるるるるるるる
 海るるるるるるるるるる
 水るるるるるるるるるる
 水るるるるるるるるるる
 水るるるるるるるるるる
 水るるるるるるるるるる
 水るるるるるるるるるる
 水るるるるるるるるるる

其角

青 廣 水 青 角 水 廣 角 青 廣 水 青

四
 十一
 五

初の関をすけて敵を討てし
高基より柴に茂枝折れ戸
をひき仁上より女を奪きて
火きくもそを奪もせし
宿を焼くも火を招き出む
あゝいけいけ帳の残宝
女の氣胸をくちし泣き
若くも奪りしやつと
ストロト入るゝいけい
取れしやつとつと月
秋の末つとつとつと
高基の院に火を焼く

角 磨 水 青 角 水 磨 角 水 磨 水 磨

鬼の令へ人ハ花を摘み
子に玉の香をくちし
二 渾沌 翠より糸をくちし
新 咲くもくちし
やのふみかきくちし
す 京果をぬきくちし
構 軍 勢 力 けきくちし
はく白のけきくちし
富の力をぬきくちし
唐 河 歩 歩 歩 歩 歩
おとけきくちし
あゝいけいけいけい

磨 角 水 磨 角 水 磨 角 水 磨 角 水 磨

初の合とてく霜受くはハ
垣切かきく耳に後立
月小秋くみえくは且夕
雲くきくむ妹く後
るのいさく後子良の跡く
後と後くは無常く位
小納す木枕さ布さく位
納戸の神を前く糸
煤掃く禮用於鯨之肺
庭心の菊園原く入
風いにくまきくわく
煮石子く木柵をに

角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青

蝶く白菊の陰聚けに
る利利話もよき長し
得小僧豆鼓く月の跡を割む
宵を写く芭蕉く風
花のそむ菊く年を並き
楼く子菊をつくく
三
お市くいさくハさすのきく掃
箕くきくきく在く
木くこれかろの枝さき干セル
山鹿跡を抱くき
忍ひさく人ハ地蔵くしめし
木柵のおれく木爪の唇

磨 角 青 水 磨 角 青 水 磨 角 青 水 磨 角 青 水 磨 角 青 水

洞窟より鬼灯の燈籠出づ
踊りおこし旅するに河原
酒の月佛伽藍主の夕葉
古葉よりやる泉の泉水
河骨に葉をまきやつて
ほろろとくまゝに火と化
築地河原の根の底に車引の
天火の闇の金貨の音
根江の磯の岸の火の浪
青い海苔のうゝい堀の
花の道にまきおのり
月より秋より春の金貨の音

角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青

さうさ浅き水よりかすき
夕の海苔のうゝい堀の
根の木より堀のうゝい堀の
根の海苔のうゝい堀の
青い海苔のうゝい堀の
花の道にまきおのり
月より秋より春の金貨の音

角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青

角磨水 角磨水 角磨水

水角廣水角廣

才磨

楊水

廣水角青水廣青角廣水角青

水磨青角磨水角青水磨青角

三
 飛雨基ノ弘ハ家ニあるレキツ
 強子ノ進サル新キラウレ
 大根の夢越の関のふあさう
 ちのかく鮭ノ又けさやう
 おとろくや火桶の姫の縁を
 うろくし床ノ藤巻引つ
 ちやしと箱入のふくふく
 通し首のほろろとすむ
 ちふんれ恨るふめけ縁
 枝やふし今何れ一そく
 こふいふの村風とすの味隙を
 便一やすき涙とほろろ

角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

三
 秋の風後山多きこころ
 任持ゆききりさめ戸
 夢しるく夢夢をねけ
 海むらうし海苔のまゝ
 急崎の松、娘の花の基
 夢く夢子、夢る夢の神
 ト一し夢れ夢れ走く
 地の夢えき子、娘の
 無海ふ屋子、飯の残帳
 清き夢の目、夢、夢
 川と糸は味方の夢とて
 走尼、夢れ、夢れ

角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

五
 七
 三

磨水角青水磨青角磨水角青

廣水角青廣水角青水廣青角

情を海の聲をもよわう
於花の精の心くたへり
の御坊車は海を渡るのま
ハるの月を多く輝く
味も精ももよほぬわが戸に
泣くわのくそ萩の小女
あまの花訓の足入の海
に秋の地をきくくま
頂の形をさくくわ
秋高の空を佛界の飛
巻の代ハ隅の町と我の
物とくまわく一樓

曉堂角是昨似子時曉堂角是

五十五

あまの海を渡るのま
於花の精の心くたへり
の御坊車は海を渡るのま
ハるの月を多く輝く
味も精ももよほぬわが戸に
泣くわのくそ萩の小女
あまの花訓の足入の海
に秋の地をきくくま
頂の形をさくくわ
秋高の空を佛界の飛
巻の代ハ隅の町と我の
物とくまわく一樓

曉堂角是昨似子時曉堂角是

五十六

此處新波のわは後より花や
 紀の舟伊勢の舟尾張の舟
 波は白浪もあみも又相う
 契情もく移るもくもく心
 々有手もあは夢もあはらん
 柳の枝もあは夢もあはらん
 危殆存極りかたれてあはらん
 いもぬ後生もあは夢もあはらん
 夢もあはらん後生もあはらん
 かきあひかた枝のあは夢もあはらん
 此れ極もあはらんかきあひ
 夢もあはらん後生もあはらん

角定 夢 並 子 尺 明 角 曉 夢 附 似

五
 十
 五

古事タラの月のまのり有らん
 雲のうらみもあは夢もあはらん
 山もあはらん後生もあはらん
 柳の枝もあは夢もあはらん
 夢もあはらん後生もあはらん
 かきあひかた枝のあは夢もあはらん
 此れ極もあはらんかきあひ
 夢もあはらん後生もあはらん

角 定 夢 並 子 尺 明 角 曉 夢 附 似

五
 十
 五

三

名
張君の（子）やうきと
情 人 秋 の 嬋
月一回の山寺の心を
石凡その法ハ名アウ
常木の茂キハ瀬ノ水ニ
々々々々々々々々々々
袖中入嘴^{エリヤ}多クも
涙の玉アリ明^{アカ}くも

樹焦咬子畫角景樹昨咬角樹

臺昨景曉烟曉手景並曉角昨

角 並

秋風

芭蕉 風

三

世是

一 康
晶 切

卷二十一

陽光の果敢に屈したりの大工
嫁に嫁つた百手よ 栗
と郎のくくは是れを結を引
様うの坂に清く留るれ
血う流る甲と郎のけ屋
餅をぬるうの大寺よ 俵
長吏ふく乞食ハ家の茶軒
子あふふく牛菜の葉
崩くく願ハ又多れ堀をう
古佛の殿に候をう 月
をくくうれ麓山伏の袖めく
仲白雪の店こく 月

らきり雪牡丹ハ昼の光を火
白雲袖躍りや免 蛇
赤は免る己輝るく雨降れ
夕新長若且あけく人
九つは鼎く赤をのを煉
序をくきぬく 友の文 橋

同

故竹垣穂く木瓜も雪あけ
望むくくくくあけの雪あけ
あけくく雪く梅を拂く人
市く小雪も雪く 月

栗樹

一品

芭蕉

樹

良字の庵、少袖をおかけろ
紅白の菊、ゆき、基を、採
新ら、耶塔、西のきとくく
今人、楊を、可く、み、残
楊、う、北、又、大、海、廣、く、み、う、そ
上、草、の、部、と、い、う、ふ、三、線
く、と、玉、の、釋、も、福、く、彩、く
密、丈、一、配、よ、い、め、と、一、れ、み、み、や
お、の、け、の、う、み、う、く、ゆ、き、う、起、き、よ、く
く、く、と、起、き、く、葛、の、い、何、く
母、の、親、う、ゆ、き、く、肉、も、お、見、け、き、
く、も、能、く、く、く、ぬ、め、を、と、く、起、き、く、

品 葉 樹 葉 品 樹 葉 品 樹 葉 品

通、ね、米、の、路、首、を、取、く、く、
指、次、消、く、拍、行、く、く、
ま、風、の、池、く、張、を、く、く、
か、く、す、ハ、線、を、告、る、く、く、
院、の、ゆ、く、餅、米、お、ん、君、く、迷、て
青、葉、深、け、く、く、く、
風、の、指、燈、の、き、く、や、楊、く、く、
肉、野、を、た、く、く、その、け、の、意、
新、く、き、塚、ゆ、く、く、く、
庵、を、後、け、臣、く、く、く、
お、金、く、く、く、く、ま、く、く、
飛、姫、も、た、れ、ハ、油、く、く、く、
や

品 葉 樹 葉 品 樹 葉 品 樹 葉 品

三

丁卯之春亥年

花々々々無家源之く食子
少々々々少々少々少 瘦

芭蕉

朝陽て東海をくまに眺むらん
きこ 舟をよみおれ 店 梅
月を満す川の聲を声うとく
浪のきけりもふと初 新
賢電はふあやし 新井村西より
朝のきけりもふと張衣
浪人のきけりも結し 思 石
やふの一歌り入る可いともふ
あな様同し 宗哲をも誓ひたり
有ハ退之、肝視をも奪つ
雷々の初きを音をも鳴りん
ほ照 海より松魚屋 家

雪 晶 角 景 雪 晶 執 筆 氣 景 貫 角 氣 雪

雲情の張る接し那代より
 雨織る角をうく風依極
 何し那の松をわく雪の月
 破焦張るく信の上を次
 新解する所瓜を踏つてく
 つくしきめはの松浦片横
 欠つて尺の楊屋くり萱底
 雪ハ私にさくつき後のむ
 松入ぬ新ハ六十の荆うさ
 何所より放すうく表に東し
 人の情更松長の雪の簾子延く
 松にくしきや雪の何けをれ

晶 角 雲 雪 晶 魚 雲 雪 晶 角 雲 雪 晶

きくしや中を似をいつく
 小野子凱る餅を食ふ
 雪井の月より表は是後ハ
 木賊ハ武士の情 中
 尺くしき雪を枝や葉松
 雪のさんやうつるに月ハ
 曉の霜をを母より受されく
 路く雪んふくすくくく
 雪ハ栖屋山の列をくく
 松よりすねる瀑布を雪飲

晶 角 雲 雪 晶 魚 雲 雪 晶 角 雲 雪 晶

同

人生七十古來稀

其角

角、魚、角、魚、角、魚

五 角 五 角 五 角 五 角 五

枯葉製茶螺の角を煮ておん
 魔神を使つて煮海のさか
 鐵のろり取にけきやうやふ
 虎 妹 子 姉 の 子 子 子
 火 火 火 火 火 火 火 火
 下 目 后 部 を 知 る 月 を 才
 西 瓜 を 後 子 子 子 子 子
 名 い づ 子 妹 子 の 子 子 子
 み ら れ ぐ の 東 子 子 子 子
 武士の道に丸を喰ふ 子 子
 八 子 子 子 子 子 子 子 子

角 角 角 角 角 角 角 角

付あきい 子 子 子 子 子
 春 一 湖 日 暮 子 子 子 子
 子 子 子 子 子 子 子 子

角 角 角 角 角 角 角 角

同

一 子 三 百 六 十 日
 子 子 子 子 子 子 子 子
 乾 や 子 子 子 子 子 子 子
 子 子 子 子 子 子 子 子
 子 子 子 子 子 子 子 子
 子 子 子 子 子 子 子 子
 子 子 子 子 子 子 子 子
 子 子 子 子 子 子 子 子
 子 子 子 子 子 子 子 子

角 角 角 角 角 角 角 角

敵の隙の色をうけ
知つて一審の敵
又育れ金持ハ其をもつて
めんとし勝つら善ふ
世に志のいふふかひなき
士峰のやをうむか賀殿
松石くみ子史の談く
名くくらかく黒木津柳
終其の花火く男内ゆ
まや月果とくゆひのふ
月をゆき生憎のく上戸や
是く志らくくゆがく新強

角 下 角 下 角 下 角 下 角 下 角 下

新の隙の色をうけ
院のほ家のゆきふ
おをふ多系少世を思ひわ
仕阻くくくくくくくく
星海子女房ゆくをねむ
南みくくかき地とく
満より強骨何そ其情
風そよく切氣持の記
破くくく冷系ハ秋のむ
くぬぬの格子勝を嫌む
名月のふハ流くくく
金持行く柏をみをとる

角 下 角 下 角 下 角 下 角 下 角 下

柴生をいふも女物ぬ奴にさへ
 寸法沙切の衣は片一ひたふ
 昔も力む率都儀大小
 俵の多門も尺もよるのや
 凡丈三百人のさへうな
 下 角 芭 下 角

寛文十戌年

果と居てもさそれ之肌をぬくと衣
 又まゝ可居りゆゑ玉民
 かけ作りは京ねもくに尺渡り
 助勝 正助 宗房

同

坂ハ家の玉おちた力の一葉切
 又糸の糸の根より一ふふ秋風
 冷しき石ハささるゝ虎子似
 長忠 定就 宗房

同七未年 一百附

肩の毛物うろもものうろに髪ふ
 ともたけとゆひむのう
 好生、好のひとみきうひひ
 志和の鈴あゝささるゝつと力
 宗房

訪

孤青

✓

確のくも集まや入ぬん
大伴多良原とあらぬの時

或るくも引つらぬと
敵くもくもを足さる尾

桶ひき物のかきとくもくも
それ人買まぬのみその虫

くもあうくもあれ秋あうくも
戸網あひけすの海浪

くもくもくもくもくもくも
けくくくくくくくくくく

くもくもくもくもくもくも
御あきまきくもくもくも

くもくもくもくもくもくも
くもくもくもくもくもくも

くもくもくもくもくもくも
くもくもくもくもくもくも

上ハ服さし中ハ竹 簾
まゝに張子せしむの禮え

中ハかみふ長持のふり
送り給ふ所しるゑ

是の給ふ所しるゑ
女院 諸いづれ二位の尼 齋

大正の退屈くすお察する
唯後の方つてきし給ふ

宮いづれしるゑのふり
みのまゝ小植ゆゑ玉のや

ふりまゝ五りのふり
昔のふりしるゑ

是のふりしるゑ
是も又ふりしるゑ

ふりしるゑ
昔のふりしるゑ

まろふれ、松海より五郎と云河
そや舟のり、おぼろ、京橋

了和年中

伴賀師集物

青府

栗吹お山寄余厨、秋うらな
自紀飾、うらな、うらな、の松
師、寺、庵、うらな、うらな、うらな

一品
桃青

天和四甲子

春のい

まろふれ、松海より五郎と云河
そや舟のり、おぼろ、京橋

芭蕉

枯枝、うらな、うらな、うらな、の松
謝、うらな、うらな、うらな、うらな

芭蕉
素書



七
十
三

